

令和 4 年 5 月 30 日現在

機関番号：53701
 研究種目：若手研究
 研究期間：2019～2021
 課題番号：19K13313
 研究課題名(和文) 英語学習における動機減退・動機向上の関係モデル構築と動機減退プロセスの検討

研究課題名(英文) Constructing relation model of motivation and demotivation and discussing motivation process

研究代表者
 佐竹 直喜 (Satake, Naoki)

岐阜工業高等専門学校・その他部局等・講師

研究者番号：70758680

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：目的は大きく分けて2つであり、英語学習における学習者の動機減退(demotivation)と動機向上の関係モデルの構築と 教室授業における英語活動とモチベーション変化のプロセスの検討である。以下の3点を中心に検証を行うこととした。
 I 動機状態に与える影響力について、内発的動機向上要因と学習内容による動機減退要因、外発的動機向上要因と学習環境による動機減退要因の影響について検証した。II 高校生との比較(中学入学後からの動機づけの変化)などを含めて高専生の動機づけの特徴についても検討し、III 中学校時・高専時それぞれの授業中における動機づけについて検証を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
 本研究はまず、効果的な英語授業を目指すことに大いに貢献するものといえる。それぞれの時間帯における学習者のモチベーションについては検討すべき重要なファクターであること、そして教師の行動も学習者の動機づけ変化プロセスに確実に起因していることなどが本研究の発見であった。高専に入ってきてからやる気が上がったという参加者も多数いたことから、興味を喚起できるような授業内容の工夫、理解を施す丁寧な説明、目標を認識させることなども大いにモチベーション低下を防ぐものになるということも分かった。特に、新型コロナウイルス感染症の影響による授業の特徴というものも今後の英語授業のあり方を考える上で欠かせない。

研究成果の概要(英文)：The purpose of the study was twofold: 1) to construct a model of the relationship between learners' demotivation (demotivation) and motivation in learning English, and 2) to examine the process of English activities and motivation change in classroom teaching. I decided to examine the following three points.
 I. The influences of intrinsic motivation factors and demotivation factors caused by learning content and extrinsic motivation factors and demotivation factors caused by the learning environment on the motivational state were examined; II. The characteristics of the motivation of technical college students were also examined, including a comparison with high school students (changes in motivation since they enter junior high schools); and III. We examined the motivation process of junior high school students and technical college students in their respective classes.

研究分野：英語教育

キーワード：英語教育 動機向上 動機減退 授業

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

教師として学生の動機づけを伸ばし、いきいきと英語学習に取り組んでもらえるようどうすべきかを考えることは最も欠かせないことである。申請者も高等学校教員を経て現在は高専教員として少しでも学生の英語学習動機づけを高められないかを熟考し、ずっと指導にあたってきた。

ただ、英語学習における動機減退についての研究は発展途上である。どれだけいい指導方法を考案しても、いつかは学生のモチベーションが下がることになり、このままでは私を含めた英語教師は彼らのモチベーション低下について頭を悩ませ続けることになる。

そこで本研究では、本研究では、英語学習における学習者の動機減退と動機向上の関係モデルの構築や、教室授業における英語活動とモチベーション変化のプロセスを検討することとした。

2. 研究の目的

目的は大きく分けて 2 つであり、英語学習における学習者の動機減退と動機向上の関係モデルの構築と 教室授業における英語活動とモチベーション変化のプロセスの検討である。

3. 研究の方法

について:(1) 高等専門学校 2・3 年生へのアンケート実施、分析。本研究の提案モデルを基に、動機状態・動機づけ要因・動機減退要因の項目についてそれぞれ作成した。動機状態の項目(10 項目(例「英語を勉強するためにベストを尽くしていると思う」))については、Al-Shehri (2009), Dörnyei and Ushioda (2011), Mori (2004), Taguchi, Magid, and Papi (2009), Ueki and Takeuchi (2012)を基に作成した。

次に、動機づけ要因の項目であるが、Deci and Ryan (1985), Honda (2005), Iwamoto (2018), Noels, Pelletier and Vallerand (2003), Sato (2009)を基に「外発的動機向上要因」(5 項目(例「英語を勉強しないと卒業できない」))「内発的動機向上要因」(5 項目(例「英語について新しいことが分かるときの満足感」))の 2 種類に今回は分けることとした。

動機減退要因の項目については、Falout and Maruyama (2004), Hasegawa (2004), Sakai and Kikuchi (2009), Satake (2016), Tsuchiya (2006)を基に、「学習環境による動機減退要因」(5 項目(例「英語を練習する時間が十分に作られない」))「学習内容による動機減退要因」(5 項目(例「テキストの内容が難しい」))の 2 種類を今回は設定した。これらの質問項目を作成する際には、酒井(2016)の指摘も参照した。

動機状態の項目については、当てはまりの強さを 5 件法(5 かなりあてはまる 4 あてはまる 3 どちらともいえない 2 あてはまらない 1 全く当てはまらない)で調査した。動機づけ要因・動機減退要因の項目については、今回の仮説モデルを実際にアンケート用紙内に提示し実施した。

(2) また、研究を進める中で、の研究へのつながりとして、対象となる学習者の特性(所属・専攻等)も深く分析が必要だと考えた。よって、その一つとして、高校生との比較(中学入学後からの動機づけの変化)などを含めて高専生の動機づけの特徴についても検討した。質問紙については、菊池・酒井(2016)に倣った質問紙を作成し、中学 1 年生から高専 3 年生までの 6 年間、各学年の初・末の 12 時点についての動機の変化を記入してもらった。0 から 4 までのリカート法(0:まったくやる気がない、1:ほとんどやる気がない、2:少ししかやる気がない、3:まあまあやる気がある、4:とてもやる気がある)で回答された。指示も菊池・酒井(2016)と同様の内容で、「次の時期に、あなたの英語学習のやる気はどれくらいでしたか。0-4 まで、適する番号を書いてください。」と指示した。

それぞれの時点での動機高揚や動機低下の経験についても菊池・酒井(2016)のように、自由記述(指示は「それぞれの時期において、英語を勉強するやる気が高まったり、減退したりした経験があれば、具体的に教えてください。」)させた。動機高揚や動機低下の 2 経験×12 時点の計 24 時点の記述欄を設けた。

について:調査参加者日本人の高等専門学校 1 年生へのアンケートを実施、分析。アンケートについては、菊池・酒井(2016)を参考にし、授業におけるモチベーションという内容に作成し直した。中学校時・高専時それぞれの授業中における動機づけについて明らかにするために、1 回の授業をいくつかの時間帯に区切り、その時間帯のやる気をそれぞれ 5 段階(5:とてもやる気がある、4:まあまあやる気がある、3:少ししかやる気がない、2:ほとんどやる気がない、1:

まったくやる気がない)で回答してもらった。中学校の授業については50分を基本として、「授業開始～10分」「10分～20分」「20分～30分」「30分～40分」「40分～授業終了」と5つの時間帯に分けてそれぞれの時のモチベーションを回答してもらった。また高専では、筆者が受け持っている90分の授業を基本として、「授業開始～15分」「15分～30分」「30分～45分」「45分～60分」「60分～75分」「75分～授業終了」と6つの時間帯の動機づけの度合いをそれぞれ回答してもらった。そして中高それぞれの時間帯において、「やる気が高まった経験」「やる気が減退した経験」を自由記述してもらった。そして最後には、中学校の時の英語授業と高専の英語授業全般を比べ、中学校の時より現在(高専)の方がやる気は上がったか、または下がったかを回答してもらい、そして参加者はその理由の自由記述を行った。

4. 研究成果

について:(1)動機状態に与える影響力について、内発的動機向上要因の正の影響が他と比べると圧倒的に強く、学習内容による動機減退要因には負の影響があり、高くはないが有意であった。外発的動機向上要因と学習環境による動機減退要因は有意ではなく、動機状態に与える影響は見られなかった。

動機状態上位群の結果では、内発的動機向上要因のみ影響力が有意であり、動機状態に正の影響があった。学習内容による動機減退要因の影響は有意傾向であった。外発的動機向上要因と学習環境による動機減退要因の動機状態に与える影響は有意でなかった。

動機状態下位群については、外発的動機向上要因、内発的動機向上要因は動機状態に有意な正の影響が見られ、学習内容による動機減退要因は有意な負の影響が見られた。協力者全体の結果における内発的動機向上要因の正の影響が他と比べると高かったのみで、それ以外の影響力が高いとはいえなかった。それについては、より効果的な動機づけの方法を考えなければならないということもあるが、当然学習者の動機状態にはその他のさまざまな要因が影響していることが起因している可能性があるの言うまでもないだろうが、その一部を示せたという点で意義があるといえる。

(2)高校生よりもモチベーションが低下するといった結果は見られず、中学1年初・末の間、そして高専1年初・末の間での動機の低下、中学3年初・末、高専3年初・末の間での変動はあったものの、また何か目標を設定し、それに向かって頑張らせることが一定の動機向上につながるといえた。試験などがあれば、それに向けて対策をしなければならず、自然と学習動機も高まるのだろう。ただ、今回の対象者は、ある程度のモチベーションは維持できていると考えられる。今後は、こういった学習者の特徴を踏まえて、 の検討を進めることとした。

について:動機の変動に与える影響とそのプロセスの検討について、研究者はそれぞれの教員の現場での授業中の学習者の動機変化のプロセスというものについての検討というのがほとんどされておらず、2021年度については、それを中心に解明を進めることとした。

高専での授業中のモチベーションの変化ということについては、授業開始時にややモチベーションが上がり、中盤から終盤にかけて下がっていくという傾向をつかむことができた。そして、高専に入学してからモチベーションが上がったと回答している学生はそうでない学生と比べて、高専でやる気を持って授業に臨んでいた。高校と違って90分授業であり、見過ごすべきではない検討である。

本研究によって、効果的な英語授業のために、それぞれの時間帯における学習者のモチベーションについては検討すべき重要なファクターであること、そして教師の行動も学習者の動機づけ変化プロセスに確実に起因していることなどを垣間見ることができた。高専に入ってきてからやる気が上がったという参加者も多数いたことから、興味を喚起できるような授業内容の工夫、理解を施す丁寧な説明、目標を認識させることなども大いにモチベーション低下を防ぐものになるということも分かった。

特に、新型コロナウイルス感染症の影響によりオンラインの授業というのも複数回実施され、他の学生との交流も難しく、モチベーションの低下につながる恐れもあることが示されたのも新しい発見である。また難易度や一方的な説明になりがちなこと中学の授業と比べて注意を払う必要がありそうだ。授業時間が違うこともあるため、やはりそれぞれの時間帯における学習者のやる気の把握は大切で、そういったことに注意を払うのも重要だといえよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 佐竹 直喜	4. 巻 29
2. 論文標題 (研究ノート) 英語学習における学習者の動機減退・動機向上の関係モデル構築に向けて -動機向上要因・動機減退要因が英語学習者の動機状態にどう影響しているか-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 英語授業研究会紀要	6. 最初と最後の頁 31-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐竹 直喜	4. 巻 54
2. 論文標題 中学入学後6年間の英語学習動機変化の調査：高専生の場合	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語文化学会論集	6. 最初と最後の頁 103-118
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐竹 直喜	4. 巻 57
2. 論文標題 英語の授業開始から終了までの動機づけ変化プロセス	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 言語文化学会論集	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 佐竹直喜
2. 発表標題 英語学習における学習者の動機減退(demotivation)と動機向上の関係モデルの構築に向けて
3. 学会等名 英語授業研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------